

Title	インド大反乱と幕末西洋銃
Sub Title	The great mutiny in India and western guns in the last days of the Tokunaga Shogunate
Author	古川, 学(Furukawa, Satoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.56, No.1 (1986. 7) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	In the Edo era Zozan Sakuma learned of the Great Mutiny in India (1857-1859) and informed Kaishu Katsu and other acquaintances of its possible effects on Japan. His intention was to open Japan to trade with the West while defending Japan's coasts. He continued his study of gunnery, designing and writing detailed descriptions of a breechloader which combined the best elements of the guns then in use. Its most prominent feature lay in the load of the cartridge. In India, just before the Mutiny, the Indian soldiers had refused to use the Enfield rifle's cartridge for religious reasons. Following this a new process of loading cartridges was introduced. This was the same process described by Zozan, who understood that this cartridge was the immediate occasion of the outbreak of the Mutiny. Kaishu recorded in detail the Shogunate's purchases of rifles in 1863, and judging from these records, they were Enfield rifles. The total number of guns imported in the closing days of the Shogunate amounted to half a million. In 1864, in order to modernize its armaments, the Satsuma clan purchased Enfield rifles through an English merchant. In 1865, the Choshu clan did the same in the name of the Satsuma clan. The man who mediated between the two clans was Ryoma Sakamoto, and, on the arrival of these rifles, the alliance between Satsuma and Choshu began. Later, both clans succeeded in overthrowing the Shogunate by their overwhelming military strength. What is historically interesting is that these Enfield rifles were disarmed from the Indian soldiers by Britain, after which they were exported and resold to Japan when she opened to trade. Because of the importation of these rifles to Japan, one may say that the Meiji Restoration (1868) was directly influenced by the Great Mutiny in India.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インド大反乱と幕末西洋銃

古 川 学

- 一 はじめに
- 二 佐久間象山の砲術研究
- 三 幕末輸入銃とインド大反乱
- 四 おわりに

一 はじめに

幕末に松代藩士佐久間象山（一八一―一六四）は漢学と蘭学に造詣深く東西の事情に通じたが、その蘭学研究の一端として阿蘭陀風説書等からインド大反乱（一八五七―一五九年）の知識を獲得し、イギリスの植民地支配に敢然と抵抗するインドの民族運動の意味と真価を把握し、それを国内に広く知らせるべく努力をした。勝海舟、吉田松陰、坂本龍馬等の象山の門人達も、象山の幅広い外国知識に触れ新しい学問を直接学んだが、その中

でも海舟は、インド大反乱が日本に及ぼす政治的影響について、象山から反乱中既にその内容を書簡で教えられた。攘夷から開国へと移りつつあった当時の日本にとって、西欧の植民地政策に対応する上で、象山のインド大反乱に関する知識は貴重な情報であり、学ぶべき多くの教訓を与えた。

象山の開国思想は、国防を固めつつ開国し、西洋の学問・芸術・文化を摂取し、新たに開始した外国との自由貿易で西欧の優れた物資を輸入することによって、東洋の古い伝統を守りつつ、西欧の植民地政策とは無縁に日本の近代化を図るものであった。¹ 一方、国防への備えは、日本が西欧列国に対して相次いで締結した開国条約と、開国によって幕府と諸藩ともたらされた西洋の最新式武器の輸入とにより、対外的にも国内的にも一層現実的

なものとなった。

ここでは、インド大反乱から象山が得た列国の政治的意識と、更に明治維新の歴史的変動の中に、大反乱がいかなる影響を及ぼしたかを具体的に考察する。

二 佐久間象山の砲術研究

象山が西洋の学問の中で最も重視したのは、政治的軍事的な意味における兵学であり、その中でも実践家としての象山がとりわけ得意とした分野は砲術であった。

日本に欧米の洋式砲術を紹介した長崎の高島秋帆（一七九八—一八六六）の砲術は、天保十二年（一八四一）幕令によって伊豆荏山奉行江川坦庵（英龍、一八〇一—五五）と、旗本下曾根金三郎とに伝授された。⁽²⁾

江川はやがて江戸で高島流砲術を伝え、象山は天保十三年九月七日に江川に師事し、翌年二月に免許皆伝となった。⁽³⁾

しかし、象山は弘化二年（一八四五）に、チールケの兵学書⁽⁴⁾（三月）、カルテンの海砲書⁽⁵⁾（六月）を得てこれを読んだ結果、江川の伝える砲術が不十分なることを知り、江川と同門の下曾根や、三河の田原藩士村上貞平等に就いて砲術を問うたが満足を得ることができず、益々原書

を研究する必要性を痛感し、その後弘化三年にベウセルの砲術書⁽⁷⁾、嘉永元年（一八四八）にブランドの書⁽⁸⁾を読んだ。これらの書物を参考にして、嘉永元年、日本人として初めて洋式に照らした三斤地砲^{ゴンドカイン}（加農砲）、十二樽人砲^{ゴンドホイツル}（榴弾砲）、十三樽天砲^{モルチール}（臼砲）を鑄造し、松代の西郊道島においてこれを試射した。以後その砲術を子弟に教授し、⁽⁹⁾嘉永三年江戸で西洋真伝砲学の門戸を開くに至った。⁽¹⁰⁾

象山が砲術を重視したことは、嘉永年間（一八四八—五四）に詠じた「銃の歌並びにはしがき」の中に、火器即ち鉄砲の「ちからのおほいなる」ことと、その「わざのくすしき」⁽¹¹⁾ことを評価したことにも認められる。

象山は安政五年（一八五八）十月、元込銃の図説を著わし、これを幕府の大老井伊直弼に献上したが、翌年六月、蟄居人であったために却下され、この「迅発撃銃図説」は松代町の長谷川五郎氏に秘蔵され、⁽¹²⁾後に『増訂象山全集』に所収された。

象山は序に続く文中に、器としての鉄砲とそれを取り扱う人間の技術とが、不可分の関係にあることを説いた上で、「西洋諸国。有施溝銃」⁽¹³⁾として西洋諸国がライフル銃を保有していることに触れ、それと対抗し得る銃の

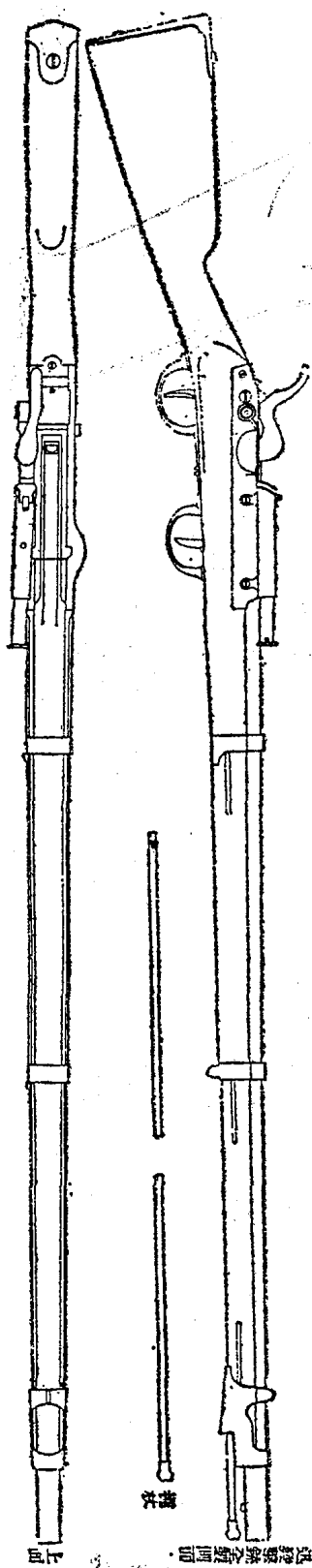
必要性を訴え、この銃はその要求に十分に応ずるもので、この銃を使用することによって、敵が一発撃つ間に味方は三・四発の発射が可能であるとして、この銃に関する内容を、銃形第一、器用第二、火薬第三、製法第四、の四つに区分して、記述した。

この銃に関して、象山はその前年に当る安政四年（一八五七）一月十日に記した「示諸友」の中に、「加西洋旧銃三倍。故有新銃一千。可抵旧銃三千。兵士三千。可当万人。是省器省餉。而得力三倍⁽¹⁴⁾」とあり、この銃一千挺で旧銃三千挺に匹敵し、兵士三千人であれば一万人に相当するだけの威力があり、正に三倍の破壊力を持つことを伝えた。

同じくこの年に記した「迅発撃銃の事」の中に、片井直徹ひそかに予にその創製せる撃銃とその装法

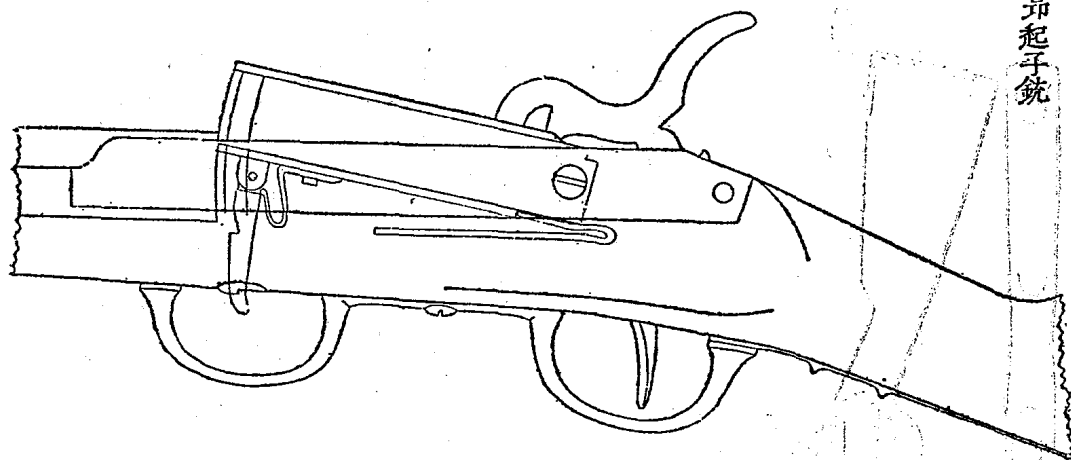
を示せり。その撃薬盒の装置、并に池蓋の如きは頗る巧妙といふべし。但、憾むる所は、直徹兵法を知らず。又、力学に達せぬが故に、議すべき所尚少なからず。瞥見の際、すでにその打がねの硬きを論じて、尾端を今少し長くしたらむには、挙ぐる時、大いに力を省くべしといふことにまで及びしなり。猶その不便なる所を改め、足らざる所を補ひ、完全の利器と成さむことを思うて、卒に其方を得たり。仮に銃を執つてその装法を試むるに、直徹がなせし所に比すれば、更に便捷なるに似たり。但、擬する所の銃未だその機を具せざれば、槌に定め難きことあり⁽¹⁵⁾。

と記し、象山の迅発撃銃は片井直徹（京助、一七八五—一八六三⁽¹⁶⁾）の創製した撃銃に改良を加えたものであつ



『増訂象山全集』巻二、迅発撃銃図説、13頁。

昂起子銃



『増訂象山全集』卷二、迅発撃銃図説、14頁。

た。

井伊大老に献上した安政五年にその試作と試射がなされたことは、この年六月十六日に依田源之丞に贈った書簡に、

工夫の筒、善市に申付候分、漸く出来上り、大に具合宜く致大慶候。就ては、御帰城前に片井手にて皆出来に致し申度、夫も望大夫より、御一声被下候様に冀ひ度、今日

出仕御座候前に、某工夫丈の所内覧に入度存候⁽¹⁷⁾とあることから明白である。

この迅発撃銃の図から認められるその最も著しい特徴は、引き金に相当すると思われるものが二つあることである。

象山は、この部分を「子銃」と称し、その昂起した様子を上のように図示する。

即ち、象山の説く「子銃」とは、遊底と呼ばれる銃の閉鎖器を意味する。

この「子銃」の使用方法に関して、象山は銃形第一に、「装時。撥前攀機。則子銃便昂起。可以装入弾薬。装訖。用掌根重圧子銃。機則闕矣⁽¹⁸⁾」と記し、前の引き金を押せば遊底が上にあがり、これに弾丸を込めた後上から押えて元の位置に戻し、次に後の引き金を引けば発射するようになった⁽¹⁹⁾。

この「子銃」にみられる遊底の装置は、弾薬の装填を先込めから元込めへと変化させ、つまり、前装銃（口装銃）から後装銃へと発展させたもので、銃砲史上、画期的なものであり、この銃は「我が国に於ける最初の元込銃⁽²⁰⁾」といわれる。

ヨーロッパにおいて、元込め (Breechloader) の後装

銃の出現は、一六六四年アブラハム・ホール (Abraham Hall) の特許に始まり、⁽²¹⁾一六三五年ロチペン (A. Rotsipen) が発明した腔銃 (rifle) により、⁽²²⁾一七七六年には、⁽²³⁾ファーガソン (P. Ferguson) の後装式施条銃 (Breech-loading Rifle) が開発された。

アメリカでは、一八一一年のホール (John H. Hall) の特許以後、後装銃は著しく発達し、一八一六年から一八二七年までの間に一万挺が製造された。

一八五七年以前に、弾丸と炸薬とを紙もしくは皮で一つにした弾薬筒 (cartridge) が発明されるに至り、後装銃を飛躍的に発展させた。⁽²³⁾

日本において、高島秋帆が天保三年 (一八三二) その私財を投じて購入したのは、ゲベル銃やヤーゲル銃であり、⁽²⁴⁾この中で日本に輸入されたゲベル銃は一七七七年改正のオランダ軍隊の制式銃で、安政元年 (一八五四) 頃には新しい雷管式のゲベル銃が紹介された。⁽²⁵⁾

安政二年には、幕府から各藩にて小銃の製作勝手たるべき許しが出、同六年になると一般に兵器の売買を許可したので、諸藩は直接開港場に出向き、外国商人から銃を購入し、また藩内の鍛冶に命じてゲベル銃を倣製させた。このため国内には口径や形状が種々な同名異形の

銃が氾濫した。⁽²⁶⁾

幕末から明治維新にかけて、諸藩の武器購入の意欲は凄まじく、銃といえはいかなるものでも購入したので、開港場に集まった外国商人達は、欧米の廃銃を大量に購入・乱売し暴利を貪った。そのため銃の種類も、十九世紀の世界の銃器を網羅した。⁽²⁷⁾

この輸入銃の装填の多くは前装銃であり、象山の「迅発撃銃図説」が完成を見た安政五年には、おそらくその殆どのものが前装銃であったと思われる。そのことは、銃器の形態が目まぐるしく変化し、新式の銃といえども直ぐに旧式のものへと化した十九世紀半ばのヨーロッパにおいて、その廃銃を外国の植民地に転売したと推察されることから首肯される。

しかし、外国商人の貿易によって輸入された鉄砲とは別に、外国の慶賀の使節によりもたらされた銃器には、後装銃が多く含まれていたと考える。この理由として、安政元年ペリーの二度目の来航の際、日米和親条約締結に日本側の代表者の一人として署名した長岡藩主牧野備前守忠雄は、ペリーから六響手銃 (六連発管打式拳銃) や大島銃入子 (後装燧石式ホール軍銃) を贈与されたことが挙げられる。⁽²⁸⁾

しかし、このホール銃にしても確かに後装式ではあったが、Hall Flint Lock Breachloader と呼ばれる一八一一年のものと思われ、いささか旧式の部類に属した。

それらの洋式輸入銃の中で、迅発撃銃の遊底の装填装置が影響を受けたのはホール銃であったといわれる。⁽³⁰⁾ 即ち、ホール銃にある遊底の引き金形の駐子を押せば遊底前方が起き上がり薬室が開かれる機構は、⁽³¹⁾ 迅発撃銃の遊底と全く同一であった。

またヤーゲル銃にあった二つの引き金も形状において模倣したところがあったと考えられる。

ゲベール銃に関しても、安政元年のペリー再来のおり、象山は松代藩の軍議役として横浜警衛に当たったが、二月十日に竹村金吾に贈った書簡に、ペリーの軍隊の将校が「四百人程のゲベル組を一人にて自由に仕候」⁽³²⁾と記し、ゲベール銃に関する知識が深かった。

象山の砲術は蘭学を通じて獲得されたものであり、チールケの兵学書、カルテンの海砲書、ベウセルの砲術書、ブランドの書に続いて、更に嘉永二年(一八四九)に一八一五年式歩兵訓練書⁽³³⁾、安政三年(一八五六)にデッケルの兵学書⁽³⁴⁾、安政六年にスチールチースの陸砲書と、次

々に兵学書を読破し、オランダを通じてヨーロッパの砲術を会得した。

従って、象山の撃発撃銃は、ゲベール銃やオランダ製ミニエー銃の影響が頗る高いと考えられる。事実、その紙製の弾薬筒や、銃身と銃床を結ぶ三個の環帯(三つバンド)は全く一致し、口径と銃身長は極めて近い数値であり、その類似性は一層確実視される。

象山自身、実際に銃形第一として、照準のための照門や照星が、「照荷蘭銃新式」⁽³⁸⁾と記し、迅発撃銃はゲベール銃よりもむしろオランダ製ミニエー銃の影響を受けたものであることは明白である。

しかしながら、オランダ製ミニエー銃そのものは、本来フランスの陸軍大尉ミニエー(C. E. Minié)の創始による前装施条銃ミニエー(Minié Rifle)の考案した弾丸を使用するものであり、⁽³⁹⁾ また一八五三年式エンフィールド銃と呼ばれるイギリス製のミニエー銃もやはり同じくミニエー銃の弾丸を使用するものであり、⁽⁴⁰⁾ その意味においてオランダ製とイギリス製のミニエー銃とは同等な物とみなされ、たとえその銃の外形等に相違が見られたとしても、その弾丸や弾丸に関する内部機構は殆ど同一な物であったと思われる。

特に十九世紀半ばにおいて、イギリスの銃器は時代の最先端を行くものであり、象山が蘭学を通じてイギリスの銃器の知識を把握し得たことは推察に難くない。このことは、万延元年（一八六〇）十二月二十四日に村上誠之丞（英俊、一八一—一九〇）に贈った書簡に、「英国にて遠町のきゝ候砲發明のよし、^(マム)荷蘭書にも昨年今年の版に候はゞ必ず其事も見え可申候⁽⁴¹⁾」とあることから推察される。

更に、火薬第三において紙で門葉を包み、器用第二においてその弾薬筒を、

以右手大食二指。撰薬包銅線下際。用力一糝。括処即断。不要更以口嚙開⁽⁴²⁾。

と記したことは、イギリス製ミニエー銃、つまり一八五三年式エンフィールド銃の影響が極めて濃厚な証拠である。尚、文中に「不要更以口嚙開」とあるその理由は次の事実による。一八五三年式エンフィールド銃は、当初左手で銃を保持し、右手と口を使って弾薬筒を噛み切る方法が行なわれていたが、⁽⁴³⁾これがイギリス東インド会社

インド大反乱と幕末西洋銃

八五七年四月八日、ボンテイン（Bontein）少佐の提案する口で噛まずに手でむしり取る装填（Load）方法が採用・公布された。

Load

1st — Bring the cartridge to the left hand, bullet resting on the palm of the right, right elbow slightly raised, tear off the top of the cartridge by the action of dropping the elbow.⁽⁴⁴⁾

つまり、これ以後東インド会社支配下のインドでは、弾薬筒を手でむしり取る方法に変化した。が、インドと無縁なオランダでは、銃の操作上、当然弾薬筒を口で噛み切る装填方法が採用されていたであろう。

一八五七年六月に、インド大反乱を正確に把握していた象山にしてみれば、インドの軍隊で行なわれた弾薬筒の装填方法の変更を知っていたことは当然の事であった。

と同時に、一八五七年のインド大反乱の直接誘因が、一八五三年式エンフィールド銃の弾薬筒にあったことを、象山は熟知していた。

幕末の厳しい政治状況の中で、象山は当時の最新銃であったエンフィールド銃を強く意識し、日本でのその必

要性を痛感していたに相違ない。

三 幕末輸入銃とインド大反乱

幕末のエンフィールド銃購入に関して頗る密接な関連を持つと思われる史料は、勝海舟（一八二三—九九）がその著『海軍歴史』の中に、「銃砲買上げの上申」として挙げた同一事項に関する四つの史料である。

これらの史料の中で、文久三年（一八六三）八月に、英国製のアームストロング砲及びライフル筒の買付けに關して、長崎奉行が幕府に対して行なった伺いには、大砲二挺の代金、銀錢一万二千枚の他に、

先般差し上げ候ライフル筒の義も別して必要の品につき、千挺注文いたし候間、大砲代とも都合銀錢五万二千枚ほどに相成り候間、右のうち三步通り手附金相渡し、来る二月までには相違なく到着いたし候筈、注文仕り候。⁽⁴⁵⁾

とあり、その送金覚書に「五万二千枚のうち、三分通り、洋銀一万五千六百枚」等は、「十月十日、英商船イーチャン船へ積み入れ差し廻す」とあることから、この年、幕府はライフル筒千挺を大砲二挺と共にイギリスに発注し、その代金、銀錢五万二千枚のうち、その手付金とし

て三分即ち、銀錢一万五千六百枚を洋銀で手渡すために、十月に長崎に入港した英商船イーチャン号へその洋銀を積み込み、翌年二月に購入されるべき大砲とライフル筒を待つていたことが知られる。⁽⁴⁷⁾

幕府が貿易の自由を認め、本格的開国に踏み切ったのは、安政五年（一八五八）六月十九日の日米修好通商条約に始まるが、その後、同年七月にオランダ（十日）、ロシア（十一日）、イギリス（十八日）と、九月三日にはフランスともほぼ同じ内容の条約を一括締結し、既に安政元年三月三日の日米和親条約で開港された下田と函館に加えて、近い将来神奈川・長崎・新潟・兵庫を開港すること等を認めていた。

つまり海舟の記すその史料は、安政五年七月十八日に締結された日英修好通商条約に基づいて開港された長崎で、その五年後において幕府とイギリスとの商業貿易の実態を示すものである。

このライフル筒に関する問題は、次の事実から明白となる。即ち、幕府がライフル筒を発注した相手国は紛れもなくイギリスであり、イギリスのライフル銃は、

・ブランスウィック銃 (Brunswick Rifle)

一八三六年

・エンフィールド銃 (Enfield Rifle) 一八五三年

・スナイダー銃 (Snider Rifle) ——エンフィールド後

装銃

一八六六年⁽⁴⁸⁾

という変遷を辿っており、幕府が発注したその文久三年(一八六三)において、イギリスで製造されていたライフル銃は、エンフィールド銃を置いて他にはない。

もともと、実際に日本に輸入された銃が、エンフィールド銃以前のブランスウィック銃である可能性もあるが、千挺というその数値から考察すれば、幕府が発注した銃がエンフィールド銃であることは殆ど間違いない。

およそ、文久三年(一八六三)から明治二年(一八六九)にかけて、横浜・長崎・兵庫・大阪・函館で購入された銃の数と額は次ページの表に示される。

購入国はイギリスが第一であり、フランス、アメリカがそれに次いだ⁽⁴⁹⁾が、この他に、諸藩が密貿易によって購入した武器の数もかなりあった⁽⁵⁰⁾。

幕府がイギリスにエンフィールド銃を発注したこの文久三年七月、即ち、幕府の発注の一ヶ月前に、薩摩藩とイギリスとは、前年八月の生麦事件をその原因として、鹿児島で薩英戦争を行なった。薩摩藩とイギリスは、共に戦争によるその被害が大きく、そのためにその年の十

一月横浜で和議が成立した。薩摩藩は生麦事件の賠償金を支払い、犯人の捜査を約束する一方、戦争の結果、軍備の近代化の必要性を痛感した。

他方、イギリスも薩摩藩のその強硬な反撃に、薩摩藩の実力を再評価し、このために薩英戦争を契機として、薩摩藩とイギリスとは相互に提携するに至った。

薩摩藩は、薩英戦争の体験を経た五代才助(友厚、一八三五―八五)を、翌元治元年(一八六四)に長崎に派遣し、イギリス商人グラバー(Thomas Blake Glover 一八三八―一九一一)の仲介によってエンフィールド銃を大量に購入した⁽⁵¹⁾。

薩摩藩の当時の武器購入量は不明であるが、慶応元年(一八六五)同藩が長崎で購入した艦船は三十七万九千ドルで、この年幕府と諸藩が長崎で購入した艦船の価格六十九万九千五百ドルの過半に達しており、同藩が長崎における最大の武器購入者であった⁽⁵²⁾。

一方、長州藩でも木戸孝充(一八三三―七七)がこのエンフィールド銃の噂を聞き、同年七月に長崎に井上聞多(馨、一八三五―一九一五)と伊藤俊輔(博文、一八四一―一九〇九)を密かに派遣し、薩摩藩と商取引のあったグラバーから、汽船と抱き合せに四千三百挺(七万

維新前後における銃購入数及び額

	購入港	挺数	金額 (ドル)	購入総額中の%
一八六三(文久三)年	横 浜	不詳	三七、八九〇	二・三八
一八六五(慶応元)年	長 崎	二五、八五〇	一六〇、〇〇〇	一三・九四
一八六六(慶応二)年	長 崎	二一、六二〇	二七〇、〇〇〇	一〇・一四
一八六七(慶応三)年	長 崎	六五、三六七	九八〇、〇〇〇	一八・六七
	横 浜	一〇二、三三三	一、三三〇、〇〇〇	一〇・二二
一八六八(明治元)年	長 崎	三六、五一四	六二〇、七三八	
	横 浜	一〇六、〇三六	一、六〇〇、〇〇〇	
	兵 庫・大 阪	一四、二八五	一二三、七六六	
	函 館	不詳	五一、〇五八	
一八六九(明治二)年	長 崎	一九、一六三	二八七、四五五	
	横 浜	五八、六一三	六四四、七四三	
	兵 庫・大 阪	三〇、〇〇〇	四九五、一四三	
合 計		四七九、七八一	六、五九九、七九三	

〔出典〕

石橋五郎「維新前後に於ける外国貿易に就いて(下)」『史林』第八卷第三号、大正十三年、六三―六四頁。
 山口和雄『幕末貿易史』中央公論社、昭和十八年、一二一、一二二頁。
 奥村正二『火縄銃から黒船まで——江戸時代技術史——』岩波書店、一九七〇年、七一頁。

七千四百兩）、慶応二―三年に七千挺のエンフィールド銃を薩摩藩の名義を借りて購入し、同藩の船でこれを下関に運ぶ方法を採用した。⁽⁵⁴⁾

その購入の任に当たったのが、土佐藩脱藩の坂本龍馬（一八三五―六七）とその亀山社中（後の海援隊）であった。⁽⁵⁵⁾

このエンフィールド銃購入を直接契機として、翌慶応二年一月二十一日、薩摩藩と長州藩とは薩長同盟を締結し、薩長の連合が成立した。

そして、このエンフィールド銃は、元治元年（一八六四）十二月から翌慶応元年初めの第二次長州征伐戦に、高杉晋作（一八三九―六七）の率いる奇兵隊の農民に使用されて幕府軍に多大の損害を与え、幕府はこの第二次長州征伐の失敗によって、その權威を全く失墜した。

その後このエンフィールド銃は、慶応四年（一八六六）の鳥羽・伏見の戦から、明治二年（一八六九）の五稜郭の戦までの戊辰戦争において広く使用され、同七年の征台の役、同九年の萩の乱、⁽⁵⁸⁾同十年の西南戦争にもエンフィールド銃の活躍は目覚しく、その影響力は圧倒的であり、⁽⁵⁹⁾大量に購入されていたことが知られる。⁽⁶⁰⁾

維新戦争の間に世界各地から日本に集まった西洋銃

インド大反乱と幕末西洋銃

は、エンフィールド銃を初めとして約五十万挺にも及んだという。⁽⁶¹⁾

極言すれば、明治維新を促進したものは、意外にもエンフィールド銃にあったと称しても決して過言ではない。

四 おわりに

幕末の日本において、エンフィールド銃がこれ程までに大量に購入されたその歴史的背景は、いかなるものであったか。

勿論、幕府或いは、薩摩藩や長州藩が、幕末のその厳しい政治状況の中で、当時の武器としてその優秀性が認められたイギリスのエンフィールド銃を太いに必要としたことは当然である。

しかしながら、この背景には更に別の要因が潜んでいた。即ち、イギリスは、インドにおいてその傭兵であるシパーヒーに、このエンフィールド銃の使用を計画し、それを一八五七年に実行に移したが、その弾薬筒に牛と豚の混合油脂が塗られていたことから、この銃の使用に對するシパーヒーの拒否反応が強硬に現われ、やがてその拒否反応はシパーヒーの暴動・蜂起へと移行し、更に

一般市民や農民をも含んだイギリスの植民地支配に対する反乱へと発展したことから、もはやインドにおいてこのエンフィールド銃を使用することが不可能であると断定し、シパーヒーに支給する為に新たに製造されたエンフィールド銃と共に、一旦シパーヒーに支給しながらも反乱中及び反乱後にその回収を行なったエンフィールド銃の処置に困惑したが、イギリス政府は時恰かも安政五年（一八五八）七月十八日に締結された日英修好通商条約によって、その交易が開始された日本へ、一八五七年のインド大反乱の直接誘因となったインドにあるエンフィールド銃を日本へ転売・輸出することを目論んだ。インド本国のイギリスよりも距離的に遥かに日本に近く、イギリスの利潤拡大にとってインドのエンフィールド銃を日本へ輸出することが最も有利であると判断し、処置に窮した武器を急遽極東の日本へ運んだことは疑う余地もない。

このことは、適、幕末当時の日本の重大な政治状況とも合致し、大量の武器を求めていた日本にイギリスが着目した事実は当然であった。

いわば、日本の明治維新は、インド大反乱の結果日本に購入されたエンフィールド銃をその共通な絆として、

インド大反乱と強く結ばれていたと解することができる。⁽⁶³⁾

安政四年（一八五七）から翌年にかけて、象山はインド大反乱に関する正確な知識を把握し、その上書や書簡によって、イギリスの植民地支配の本質とそれに抵抗するインド民族の実態を日本の国内にも周知させるべく努力したが、彼の危機意識とは別に、インド大反乱はエンフィールド銃購入という形をとって日本に波及したのである。

一八六八年に明治維新として結実する日本の倒幕運動は、インドにおいて一八五七―五九年に勃発した大反乱が種々な意味で直接関接に少なからざる影響を及ぼしていたということが出来る。

註

(1) 象山のインド大反乱に関する知識は、拙稿「インド大反乱と佐久間象山」『史学』前号参照。

(2) 吉岡新一『古銃』河出書房新社、昭和四十年、六四―六六頁。

(3) 飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」『増訂象山全集』卷一、佐久間象山先生小伝、十一、十三頁。

(4) 『増訂象山全集』卷三、書簡一四三、三〇六頁。

原書 J. G. Tielke, *Onderrigt voor de Officieren die zig in den Veld-Dienst, 1 Deel, Veld-Ingénieur, 2 dln., Arnhem, 1793.* [士官用野戦勤務教範。野戦上兵。]

(5) 『増訂象山全集』巻三、書簡一五一、三四一頁。

原書 J. N. Calten, *Leidraad bij het onderrigt in de Zee-Artillerie, Delft, 1832.* [海上砲術備要]

(6) 飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、一五一—一六頁。

(7) 『増訂象山全集』巻二、上書、一四七、一四八、一四九頁。巻三、書簡一六七、三八〇頁。巻五、書簡一二一一、六一〇頁。

原書 W. F. Beuscher, *Handleiding voor Onderofficieren, tot de Kennis der theoretische en praktische Wetenschappen der Artillerie, 3 dln., 's Gravenhage en Amsterdam, 1834 (III), 1835 (II), 1836 (I).* [士官用入門、砲術理論と実践知識]

(8) ブラント『ロイテル伝』——『増訂象山全集』巻三、書簡二二五、四五八頁。

原書 G. Brandt, *Het leven en bedrijf van den Heere Michiel de Ruyter, 5 dln., 1687, 1835.* [ト・ロイテル卿(提督、一六〇七—七六)の生涯と活動]

ブラント『三兵タクティーク』——『増訂象山全集』巻二、上書、一四七、一四八頁。巻三、書簡三一六、六〇四頁。巻四、書簡六五一、四九六、四九七頁。巻五、

インド大反乱と幕末西洋銃

書簡二二二、六一〇頁。増沢淑『科学の先駆者 佐久間象山』日本書房、昭和十七年、六七頁。

原書 H. von Brandt(vertaald door J. J. Mulken), *Taktiek der drie Wapens, Infanterie, Kavallerie, en Artillerie, 1833, Breda 1837 (ve.).* [歩騎砲三兵戦術]

訳書、鈴木春山『三兵活法』弘化三年訳、安政四年刊。

(9) 『増訂象山全集』巻二、一四七—一四八頁。飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、一七頁。増沢淑『科学の先駆者 佐久間象山』前掲書、七二—七四頁。

(10) 飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、二二頁。

(11) 『増訂象山全集』巻二、和歌附和文、二七—二八頁。

(12) 同上書、迅発撃銃図説、扉。

(13) 同上書、五頁。

(14) 『増訂象山全集』巻一、文稿、七九頁。

(15) 『増訂象山全集』巻二、補遺、十七—十八頁。

(16) 片井直徹とその銃に関する研究には、次のものがある。

安齊實『砲術——その秘伝と達人——』雄山閣、昭和四十年。同『江戸時代砲術家の生活——砲術・その秘伝と達人——』生活史叢書一八、雄山閣、昭和四十四年、一六三—一七二頁。

松代信松会『歴史と文化のまち まつしろ』長野松代ライオンズクラブ、昭和五十七年、四五頁。

長野市真田宝物館・真田邸・松代藩文武学校・象山記

念館『真田家と佐久間象山』長野市観光協会、松代観光事業振興会、二十頁。

(17) 『増訂象山全集』巻五、書簡七八三、五七頁。

(18) 『増訂象山全集』巻二、迅発撃銃図説、六頁。

(19) 宮本仲『佐久間象山』岩波書店、昭和七年。同、解題奈良本辰也『佐久間象山』岩波書店増補版復刻、象山社、昭和五十四年、一七〇頁。増沢淑『科学の先駆者佐久間象山』前掲書、七八頁。

(20) 飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、三八頁。

(21) H. J. Branch, *A century of Guns, a sketch of the leading types of sporting and military small arms with over 150 illustrations of guns and rifles*, Ep Publishing Limited, England, 1909, 1976, p. 37.

(22) *Ibid.*, p. 11.

(23) *Ibid.*, p. 37. 岩藤憲人『鉄砲入門』広済堂、一九七七年、一四一—一五頁参照。

(24) 吉岡新一『古銃』前掲書、六四頁。

(25) 所莊吉『火縄銃』雄山閣、昭和三十九年、一六〇頁。

(26) 同上書、一六〇—一六一頁。

(27) 以前遊就館に陳列されていたものには、ゲベール銃、ヤーゲル銃、ヤーゲルビュッセ銃、ミニエー銃、エンフイールド銃、スペンサー銃、シャスポー銃、ドライゼ銃、シャープス銃、スタール銃、ウィルソン銃、スナイダー銃、アルビニー銃、ウエストリー・リチャード銃、レミ

ントン銃、マンソー銃等前装式滑腔銃三種、前装式施条銃十三種、直動鎖門式銃七種、回転鎖門式銃十五種、底礎式銃十五種、蓑囊式銃五種、活翟式銃十種、扛起式銃二種、遊底偏心式銃二種、銃身偏出式銃三種、元折式銃四種、弾巢式銃八種、特殊銃二種等があった。(同上書、一五九—一六〇頁。)

(28) 安齊實『砲術——その秘伝と達人——』前掲書、同『江戸時代砲術家の生活——砲術・その秘伝と達人——』前掲書、二四四—二四五頁。

(29) H. J. Blanch: *op. cit.*, pp. 37, 67.

(30) 安齊實『砲術——その秘伝と達人——』前掲書、同『江戸時代砲術家の生活——砲術・その秘伝と達人——』前掲書、一六八—一六九頁。所莊吉『増補図解古銃事典』雄山閣、昭和四十七年、一四四頁。

(31) 所莊吉『増補図解古銃事典』同上書、一四四頁。

(32) 『増訂象山全集』巻四、書簡四九六、二二二頁。書簡四九七、二二七頁参照。

(33) 飯島忠夫校訂、三井圓二郎編纂「佐久間象山先生年譜」『増訂象山全集』巻一、年譜、四二頁。飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、一九頁。

原書 *Reglement op den Inwendigen Dienst, de Politie en de Krijgstucht voor de Infanterie, van het Koninkrijk der Nederlanden, 's Gravenhage en Amsterdam, 1814.* [オランダ王国軍歩兵の内務、風

紀及び軍紀の規定

- (34) 『増訂象山全集』巻四、書簡六三八、六三九、六五一。
四六一、四六二、四七一、四九五、四九六、四九七頁。
原書 C. von Decker, *Taktiek der drie Wapens, Infanterie, Kavallerie en Artillerie*, 2 dln., Breda, 1831, (ve.) 1831 (I), 1833 (II).
訳書 高野長英訳『倅氏三兵答古知幾』四十巻。
- (35) 『増訂象山全集』巻二、上書、一四八、一四九頁。巻五、書簡一〇三九、三九一頁。
原書 G. J. Stieltjes, *Omschrijving van den verleden en tegenwoordigen Toestand der Nederlandsche Veld-Artillerie*, Gebroeders van Cleef, 's Gravenhage, 1848. [オランダ野砲隊、過去と現在の情況解説]
——, *Handleiding tot de Kennis der Verschillende Soorten van Batterijen*, Breda, 1832. [各種砲台知識入門]
- (36) 迅発撃銃の口径、五分三厘＝一六・〇三ミリに対して、ゲベール銃は一七・五ミリ、オランダ製ミニエー銃は一六・六ミリである。
- (37) 迅発撃銃の銃身長、三尺五寸七分＝九七・七八センチメートルに対して、オランダ製ミニエー銃は九九・五センチメートルである。
- (38) 『増訂象山全集』巻二、迅発撃銃図説、前出、七頁。
- (39) 所莊吉『火繩銃』前掲書、一六二頁。同『増補図解古銃事典』前掲書、一一五頁。
- (40) 所莊吉『火繩銃』同上書、一六三―一六四頁。同『増補図解古銃事典』同上書、一一五頁。
- (41) 『増訂象山全集』巻五、書簡九三五、二六五―二六六頁。
- (42) 『増訂象山全集』巻二、迅発撃銃図説、前出、一〇頁。
- (43) J. A. B. Palmer, *The Muring outbreak at Meernut in 1857*, Cambridge Univ. Press, 1966, p. 17.
- (44) *Ibid.*, p. 18.
- (45) 服部真長・松本三之介・大口勇次郎編『勝海舟全集』一二、海軍歴史Ⅰ、頸草書房、一九七一年、一七七頁。
勝海舟全集刊行会代表江藤淳編『勝海舟全集』八、海軍歴史Ⅰ、講談社、一九七三年、二六六頁。
- (46) 『勝海舟全集』一二、頸草書房、同上書、一七九頁。
『勝海舟全集』八、講談社、同上書、二六八頁。
- (47) 尚、海舟は「アメリカ献貢ミニー銃製造器械引渡し方の指令」「オランダ商人所持ミニー銃五〇〇挺買上げの伺い」等の史料も掲載した。(『勝海舟全集』一五、陸軍歴史Ⅰ、頸草書房、一九七六年、三二〇、三五九―三六四頁。『勝海舟全集』一二、陸軍歴史Ⅱ、講談社、一九七四年、七八―七九、一三二―一三三頁。)
- (48) H. J. Blunch, *op. cit.*, p. 27.
所莊吉『火繩銃』前掲書、一七〇頁。同『増補図解古銃事典』前掲書、一五八頁参照。但し、Blunch はスナインド大反乱と幕末西洋銃

イダー銃の開発を一八六七年とし、所氏は一八六六年とするが、本稿では一八六六年を用いた。

尚、福沢諭吉の『雷銃装法』（三巻、巻之一——慶応三年、巻之二——明治元年、巻之三——明治三年）は、巻之一が一八六四年版訳でエンフィールド銃の、巻之二・三が一八六七年版訳でスナイダー銃の操作方法について著わしたものである。（慶応義塾編纂『福沢諭吉全集』第二巻、岩波書店、昭和三十四年、一一一一頁。）また福沢は洋式砲術修業に關しても、『福翁自伝』（明治三十一—三十二年）に記した。（『福沢諭吉全集』第七巻、昭和三十四年、一五一—一六、二三—二四、四二頁。河北展生『国史特殊Ⅲ（幕末史）』慶応通信、昭和五十一年、一一頁参照。）

(49) 山口和雄『幕末貿易史』中央公論社、昭和十八年、一二三頁。奥村正二『火縄銃から黒船まで——江戸時代技術史——』岩波書店、一九七〇年、七一頁。

(50) 奥村正二、同上書、七一頁。山崎隆三『幕末維新期の経済変動』『岩波講座・日本歴史13、近世5』岩波書店、一九七七年、一四四頁。

(51) 吉岡新一『古銃』前掲書、七一頁。所莊吉『火縄銃』前掲書、一六四頁。遠山茂樹『明治維新』岩波書店、一九七二年、一六六頁。

(52) 石井孝『明治維新の舞台裏、第二版』岩波書店、一九七五年、七〇頁。

(53) 吉岡新一『古銃』前掲書、七一頁。遠山茂樹『明治維新』前掲書、一六六頁。有馬成甫『幕末における西洋火器の輸入』『日本歴史』第二二〇号、昭和三十三年、七頁。石井孝『明治維新の舞台裏、第二版』前掲書、七四頁。石井氏によれば、慶応元年にはミニエー銃の他に、ゲベール銃三、〇〇〇挺、一五、〇〇〇両もあった。（石井孝『明治維新の国際的環境』吉川弘文館、昭和四十一年、四八八頁。）また河北氏は、慶応元年八月、ミニエー銃四〇〇挺、ゲベール銃三、〇〇〇挺を持帰ったとする。（河北展生『国史特殊Ⅲ（幕末史）』前掲書、一一〇頁。）

(54) 長州藩では、この他に大村益次郎（村田蔵六）をアメリカ船に乗船させて、上海に赴かせ、武器購入に当たさせた。（遠山茂樹『明治維新』前掲書、一五四頁。）

(55) 同上書、一五五頁。

(56) 吉岡新一『古銃』前掲書、七一頁。

(57) 所莊吉『火縄銃』前掲書、一六五頁。

(58) 吉岡新一『古銃』前掲書、七三頁。

(59) 所莊吉『火縄銃』前掲書、一六五頁。吉岡新一『古銃』前掲書、七三頁。

(60) 長崎駐在英國領事フラワーズは一八六八年に次の報告を行った。「この四半世紀に日本人が武器の中でも群を抜いて優秀性を認めていた短エンフィールド銃は戦争初期には一挺当り一七一—一八ドルであったが、今や一一—一二ドルで大量に購入することができる。……（中略）……」

特にエンフィールド銃の弾薬筒は大量に輸入されたが、市場にもたらされたのは運悪く最近のことで、日本人はすでに自分達自身の弾薬筒を大量に製造しているので外国製のものに対する需要は大きく減少するであろう。」

(Commercial Report 1868, Nagasaki, p. 31. *British Parliamentary Papers, Japan*, Vol. 4, pp. 372-373.

杉山伸也「グラバー商会——幕末期の長崎貿易と外商——」近代日本研究会編『年報・近代日本研究——三——幕末・維新の日本』山川出版社、一九八一年、四八九頁より引用。

(61) この数値は石橋氏の研究に基づくが、有馬氏は二十二万挺とし、洞氏は七十万挺に及ぶとみる。(石橋五郎「維新前後に於ける外国貿易に就いて(下)」『史林』第八巻第三号、大正十三年、六三—六四頁。有馬成甫「幕末における西洋火器の輸入」前掲論文、一三頁。洞富雄「維新前後に輸入された小銃の数量」『日本歴史』第八〇号、昭和三十年、五八頁。同「幕末維新外国貿易額に関する英国青書の信憑性について——輸入小銃の数量に関連して——」『日本歴史』第二二三号、昭和三十三年、二二頁。同「幕末維新期の外圧と抵抗」校倉書房、一九七七年、四三四、四四五頁。)

また南坊氏は、明治三年に各藩が所有した銃砲等の調査報告をまとめ、その数を三十七万挺とする。(南坊平造「明治維新全国諸藩の鉄砲戦力」『軍事史学』第十三

インド大反乱と幕末西洋銃

巻第一号、昭和五十二年、七七頁。)

(62) T. R. Metcalf, *The aftermath of Revolt, India, 1857-1870*, Princeton Univ. Press, 1965, p. 305. H. S. Batia, *Military History of British India (1607-1947)*, Deep & Deep Publications, New Delhi, 1977, p. 200.

(63) エンフィールド銃の日本輸入経路に関しては、クリミア戦争からアメリカ南北戦争へと移り、それが戊辰戦争へと渡ったとする指摘もある。(升本清「幕末の銃砲」『蘭学資料研究会報告』第一七二号、一九六五年、九頁。)尚、エンフィールド銃の多くはその後スナイダー銃に改造されたが、明治十三年にこれらの輸入銃に代わり、国産の村田銃が制式銃として採用された。(所莊吉『火縄銃』前掲書、一七三頁。同『増補図解古銃事典』前掲書、一五七頁。吉岡新一『古銃』前掲書、七七頁。)

追記

象山の蘭書に関しては、大久保利謙編『洋学ことはじめ展——蘭学の諸系列と江戸幕府旧蔵本——』上野図書館内蘭学資料研究会、昭和二十九年。池田哲郎「佐久間象山と蘭学——象山蘭書志——」『福島大学学芸部論集』第十号、一九五九年。佐藤昌介『洋学史の研究』中央公論社、昭和五十五年。及び、象山蔵書、『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』昭和五十五年、国立国会図書館蔵本等に基づいており、その訳語は諸研究によるものに、更に原語に照合し補足したものである。

The Great Mutiny in India
and
Western Guns in the Last Days of the Tokugawa Shogunate

Satoru FURUKAWA

史

学

第五十六号

第一号

In the Edo era Zôzan Sakuma learned of the Great Mutiny in India(1857-1859) and informed Kaishû Katsu and other acquaintances of its possible effects on Japan. His intention was to open Japan to trade with the West while defending Japan's coasts.

He continued his study of gunnery, designing and writing detailed descriptions of a breechloader which combined the best elements of the guns then in use. Its most prominent feature lay in the load of the cartridge. In India, just before the Mutiny, the Indian soldiers had refused to use the Enfield rifle's cartridge for religious reasons. Following this a new process of loading cartridges was introduced. This was the same process described by Zôzan, who understood that this cartridge was the immediate occasion of the outbreak of the Mutiny.

Kaishû recorded in detail the Shogunate's purchases of rifles in 1863, and judging from these records, they were Enfield rifles. The total number of guns imported in the closing days of the Shogunate amounted to half a million.

In 1864, in order to modernize its armaments, the Satsuma clan purchased Enfield rifles through an English merchant. In 1865, the Chôshû clan did the same in the name of the Satsuma clan. The man who mediated between the two clans was Ryôma Sakamoto, and, on the arrival of these rifles, the alliance between Satsuma and Chôshû began. Later, both clans succeeded in overthrowing the Shogunate by their overwhelming military strength.

What is historically interesting is that these Enfield rifles were disarmed from the Indian soldiers by Britain, after which they were exported and resold to Japan when she opened to trade. Because of the importation of these rifles to Japan, one may say that the Meiji Restoration (1868) was directly influenced by the Great Mutiny in India.

一八
(一八)